経営のひろば

歩いて幸せをつくる（1）

富山短期大学名誉教授　川中清司

●心で歩こう、自然と話そう

歩くことは楽しい。歩けば季節を肌で感じる。タンポポが咲いた。青空にポッカリ白い雲が浮かぶ。キンモクセイが香る。自然の中にいる自分を実感し、喜びにひたる。

出会った人に声をかける。「今日は暑いですね」「秋空がきれいですね」。あいさつをすると、自分とのつながりが増える。

笑顔で相手と話す、相手を想う。そして、相手の無事を祈る。いま必要なのは、人と人とのつながりを深めること。絆を深めて人間らしい社会を復活させることだ。

●歌いながら歩く

歌いながら歩く。あまり大声で歌うと疲れるし、変に思われる。鼻歌ぐらいがちょうど良い。

歌にはその人の思い出が残っている。「夕焼け小焼け」を歌えば、幼いころがよみがえり、「青い山脈」を歌えば青春を想い出す。

よく軍歌も出てくる。私の子どものころは戦争一色で、学徒動員で軍需工場に徴用された。「予科練の歌」や「ラバウル航空隊」を想い出し、口ずさむこともある。若いころのさまざまな懐かしさに浸り、涙ぐむこともある。そして今の生きる勇気につながっていく。

●幸せは歩いてこない

「三百六十五歩のマーチ」は、明るく励ましてくれる人生の応援歌だ。水前寺清子のヒット曲で一九六八（昭和四三）年に発表された。明るい歌声とテンポの良さで、たちまち日本中に広がった。

「しあわせは　歩いてこない
だから歩いていくんだね♪
一日一歩　三日で三歩　三歩進んで　二歩さがる♪
人生はワン・ツー・パンチ　汗かき　べそかき　歩こうよ♪
あなたのつけた足あとにゃ　きれいな花が　咲くでしょう♪
腕を振って　足をあげて　ワン・ツー　ワン・ツー♪
休まないで　歩け　ソレ　ワン・ツー　ワン・ツー♪」

●生きた歴史を体感する

日ごろ住み慣れたわが町も、ゆっくり歩けば、思いがけない歴史に出会える。今の自分とのつながりに感動を覚えるものだ。

近くの神社やお寺もよい。田んぼの脇のお地蔵さんもよい。何百年も前にそこに暮らしていた私たちの先祖が残してくれた、尊いものがある。

それらをじっくりと見つめ、味わいながら歩く。それは今の自分の存在を確かなものにし、勇気づけてくれる。

愚者は経験に頼り、賢者は歴史に学ぶ。昔の人が歩いた道を行けば、歴史がよみがえる。

●商店街の踏み地蔵

一例をあげよう。

鯖江市の商店街、長泉寺通りを行くと、仰向けに寝かされた数体のお地蔵さんに出会う。天正のころ、織田信長が越前の朝倉義景を攻め滅ぼした。ここに三十六坊があったが、ことごとく焼き払われ、多くの石仏は谷や川に投げ捨てられた。

ある日「我を踏み橋とせよ」と地蔵菩薩の夢のお告げがあった。村人が掘り起こして北陸道の小川の橋とした。わが身を捨てて、縁ある衆生は踏めという。目鼻はすり減って頭と胴だけのみ仏の姿が残る。

●安政の大獄と庶民公園

西山公園に足を伸ばし、響陽渓（きょうようけい）の碑の前に立つ。刻まれた「與衆同楽」の詩がよい。

安政のころ、鯖江藩主の間部詮（まなべあきかつ）勝が、庶民のためにこの公園を開いた。当時、幕府は日米通商条約を結んだ。反対する多くの志士が弾圧された。世にいう安政の大獄

今年は間部公の鯖江藩主就任二〇〇年にあたる。その波乱の一生を市民グループが七月一三日、二時間半にわたって熱演。牧野百男鯖江市長も参加し、代表の水野正秋氏が藩主役を見ごとに演じた

で、吉田松陰や隣の越前藩の橋本左内らが処刑された。

間部は老中を務め、外国御用掛（外務大臣）だった。志士らの命を奪う刑に反対したが、井伊大老に容れられず幕閣を去る。二〇〇年の歴史が一瞬によみがえる。

●心を静めてゆっくりと歩く

人生、いろいろな局面に出くわす。肉親との別れ。事業の破綻。誠意が認められず、逆に批判され、攻撃されることもある。不運なことは重なって起こるものだ。

そんなときは、歩調をゆっくりとして心を静める。歩く座禅である。お経を唱えるのもよい。お経のリズムが気分を穏やかにしてくれる。不思議と気持ちが和み、ゆったりと対処できる。明日への勇気と喜びが湧いてくる。今までいくつもそんな経験をしてきた。

●観音経を唱えて歩く

いわれのない罪で裁判にかけられ、被告の座に立たされた。真実は明白であり正義はわれにある。ひたすら事実を訴えて公正な裁きを待った。そんなとき、静かに観音経を唱えながら歩いた。心が落ち着き正しい主張ができて、認められ勝訴となった。

「諍訟経官處、怖畏軍陣中、念彼観音力、衆恨悉退散」―裁判や軍陣の中で恐怖にあるとき、観音さまを念じなさい。恨みはことごとく消え失せます。

●わが屍は野に捨てよ

一生を歩き続けた一遍上人のことを思う。時宗の開祖で浄土教を確立した名僧「遊行」である。すべてを捨ててひたすらに歩く。「捨聖」と呼ばれた。

行き交う人々に、南無阿弥陀仏のお札「賦算」を。六〇万人に渡す決意を固めた。南は九州から北は奥羽までくまなく遊行した。

衣服はボロボロになり、野宿が多く、草の根をかじり、七日間の絶食もあった。「わが屍は野に捨てよ」。正応二（一二八九）年、摂津国の観音堂で五一歳の生涯を終えた。

●世界一貧しい大統領に学ぶ

ウルグアイのホセ・ムヒカ大統領は、質素な小さな家に住み、個人財産はほとんど持たない。「世界一貧しい大統領」と呼ばれている。この国の平均月収は約九万円。それに比べて、大統領は九〇万円。立派なマンションに住み贅沢も可能だが、あえて贅沢はせず収入の九割は寄付し、貧しい生活を送っている。

人間はぜいたくな暮らしを求めて、常に何かを欲しがる。「八〇億もの人が今の豊かな生活をして〝消費とムダ〟を維持することはできない。それだけの資源が地球には残されていない」と警告する。「一番大事なものは命。人間の幸せを助けること」と言う。

歩きながら考える。今の日本はこれで良いのだろうか。